

ち」がそれで、いずれも大そうメロドラマチックなものであった。血の抗争と原住民による残虐行為を満載した内容だが、初期カナダ人の複雑なメンタリティをよくあらわしている。すなわち、見覚えがあり、したがって安堵感を与えるゴシック風の恐怖の風習の中に表現された未開の大自然に対する恐れとか、題材を扱う際の実際主義などがありありと読み取れるのである。リチャードソンの文章は機能的で物を観察する目もきわめて正確、とくに身をもって体験した軍事行動の描写に関してはそうである。

リチャードソンに続くカナダの小説家は、歴史もののジャンルにとらわれているようであり、とくに一七五九年の英国の勝利以前のロマン化されたニュー・フランスに題材を求めたものが多い。この傾向に、ロザンナ・レブローンの「アントワネット・ド・ミルクール」(一八六四年)、ウイリアム・カービーの「黄金の犬」(一八七七年)がある。その他の作家は、当時ふえつつあった巡回圖書の読者むけに、おさまりの恋愛小説を書く者が多かった。

一九二〇年代に入ると、カナダ詩界の長期にわたる隆盛——今もなお続いている——が始まった。E・J・プラットの初期の詩集「ニューファンドランドのうた」(一九二三年、など)や、ドロシー・リブセイの初期の詩「グリーン・ピッチャー」(一九二八年)、A・J・M・スミス、F・R・スコット、A・M・クラインなどを含むモントリオールの若き詩人グループ(一九二〇年代に雑誌「マクギル・フォトナイトリ・レビュー」に集まっ

たグループで、一九三六年に有名なアンソロジー「ニュー・プロビンシズ」を発表したが、これはカナダの詩史上、重大な位置を占めるとされている)などにおいて、カナダの詩は植民地的な過去への依存性からぬけ出て、まず英米のモダニズムから多くを得つつ、コスモポリタニズムへ、そして次にはカナダ自身の驚くほど多様性に満ちた声を発見するまでに成長した。

前にあげた詩集「ニュー・プロビンシズ」にスミス、スコット、クラインらと筆をとったE・J・プラットは、ルディ・ブラスト風の二行連句で叙事詩を書く、ある種の創造者であった。フランス領カナダ時代のイエズス会殉教者をテーマとした詩「プレフと信者たち」(一九四〇年)や、CPR(カナダ太平洋鉄道)建設をうたった詩「最後のスパイク」(一九五二年)は、彼より若い世代の形式的なモダニズムにはない何か、つまりそれを補う個性を、カナダ詩界に与えたのである。



プラットの作品

一九三〇年代は、カナダの詩に關して収穫の時代というよりは種まきの時代と見なければならぬ。世界的な不況により本の出版は難しくなった。事実、スミスやスコット、クラインらがそれぞれ処女詩集を出版したのは、一九四〇年代になってからである(この事情は他の精力的な若手詩人アール・バーニーやP・K・ページ、ルイス・デュデック、

アービング・レイトソン、レイモンド・スースターにしても同じことである)。ここにあげた詩人のうちプラットとクラインを除いて、あとの全員が現在でも詩人として活躍している。むしろアール・バーニーとかドロシー・リブセイなど最年長組の何人かは、この十年間で今までのどの時期よりもすぐれた活動をしているほどである。

以上にあげた一九三〇年、四〇年代の世代に続くのが、一九五〇年代の若手詩人の新人群であろう。アカデミックで知的なこの詩人達は、カナダの偉大な批評家ノースロップ・フライが唱えた文学と神話の役割に関する理論に影響を受けた。たとえ実践の面では異なっても、詩人の役割というものに対する考え方においては大きな影響を受けている。このグループでは、ジェームズ・リーニーとジェイ・マクファーソンが中心的存在であったが、カナダの詩界全体が開花するのは、むしろ一九六〇年代に入ってからである。一時期、小新聞、小雑誌、それに新人の詩人が続出したことがあったが、これが大衆的な動きにまで広がっていった。一九六〇年代には、一年間で百冊もの新しい本が発行されている。一九五〇年代の初め頃はこれがほぼ一ダース程度だったのであるから、いかに目ざましい隆盛であるかがわかっていようものである。一九六〇年代には五百人をこえる数の詩人がきちんとした本の形で作品を発表した。その多くはあまり大きな意味を持たなかったが、それでも驚くほど大勢の優秀な詩人が出現した。主な詩人の名前をあげただけでも、カナダの詩界がいかに豊富



な陣容であるかがわかるであろう。しかもその詩風はきわめて多様であって、ジョン・グラスコのアイロニックな古典主義、ポー・ニコルの具体的なイデオロム、アル・パーデイの口語体の饒舌、マーガレット・アトウッドの碑銘のごとき縮まった語法、とあらゆる試みが含まれている。そのほか定評ある詩人としては、フェイス・ウエブ、レオナード・コーヘン、マーガレット・アビソン、オールデン・ノーラン、グウェンドリン・マキューエン、ジョージ・パワリングがいる。独創的な若手詩人には、スーザン・マスケグ、デーブ・デル・ジューロス、シド・マートイ、トム・ウエイマン、マイケル・オンダーチェ、パトリック・レーン、マイケル・オンダーチェ、パトリック・レーンをあげることができよう。この新しく出た真正銘の詩人たちに共通のテーマがあるとすれば、それはこの国の地理的特質と歴史の残響に対する深い感情であろう。かつては散文、しかも陰気な散文しか生まなかったように見える大平原のきびしい自然の中で詩が興隆したことに、このことがきわめてはつきりと示されている。

**カ** ナダの小説が、その土地の生活が求めるものに強く呼応するひとつの